

## 「イエシュアの祈り～後篇～」

ヨハネの福音書 17:11～26

### はじめに

前回に引き続き、今日の箇所もすべてイエシュアが御父である神様に向けて語られる「イエシュアの祈り」のみで綴られています。前回のおさらいになりますが、このイエシュアの祈りの冒頭はこのように始められました。

#### 【新改訳改訂第3版】

ヨハネ

17:1 イエスはこれらのことを話してから、目を天に向けて、言われた。「父よ。時が来ました。あなたの子があなたの栄光を現すために、子の栄光を現してください。

この「時が来ました」の「時」とは、直接的にはイエシュアが十字架にかかれることを指すのではなく、

#### 【新改訳改訂第3版】

ヨハネ

13:1 …この世を去って父のみもとに行くべき自分の時が来た…

とあるように、この世を去って父のみもとに行くべき「時」のことであり、弟子たちから離れて、天に上げられることであるということをお前回述べました。もちろんそれはイエシュアが十字架にかかれ、死んで葬られ、よみに下り、三日目よみがえられてからのことですが、イエシュアが目留めておられたのはただ御父のみもとに行くこと、つまり御父との関わり、交わりを持つことだけ、その「一事」でした。ダビデが詩篇の中でこのように歌っています。

#### 【新改訳改訂3】

詩篇 27:4 私は一つのことを主に願った。私はそれを求めている。私のいのちの日の限り、主の家に住むことを。主の麗しさを仰ぎ見、その宮で、思いにふける、そのために。

ダビデは王であっただけでなく預言者でもありました（使徒 2:30）。ですからこの歌はダビデの心情を歌った歌というよりも、イエシュアについて、イエシュアという御方がどのような御方であることを示したものであると考えられます。なぜなら詩篇とはそのような書であるからです。

#### 【新改訳改訂3】

ルカ 24:44 イエスは言われた。「わたしについてモーセの律法と預言者と詩篇とに書いてあることは、必ず全部成就するということでした。」

実際に、御父である神様だけを思い、その御心だけを成し遂げるために遣わされ、御父の語れと言われることだけを語られたイエシュアの姿、その働きと生き様は、この詩篇 27:4 に最も相応しい存在と言えます。ですからイエシュアがいかにか御父との交わりを恋い慕い、ひたすらに求めておられた御方であるかということを変更して覚えつつ、今日の内容に入っていきます。

## 1. 聖なる父

### 【新改訳改訂第3版】

ヨハネ

17:11 わたしはもう世にいらなくなります。彼らは世にいますが、わたしはあなたのみもとにまいります。聖なる父。あなたがわたしに下さっているあなたの御名の中に、彼らを保ってください。それはわたしたちと同様に、彼らが一つとなるためです。

「あなたのみもとにまいります。」冒頭だけでなく、ここでもイエシュアが御父との交わりを思い、祈っておられることが解ります。それは同時に「世にいらなくなること」、世から離れることを意味します。そしてイエシュアはここで御父に向かって「聖なる父」と呼んでおられます。実はこの呼び方は聖書の中でここにしか記されていない貴重な呼び方ですから、注目すべき内容が記されていると考えられます。この「聖なる父」という「御名の中に、彼らを保ってください。」と祈っておられます。この「彼ら」とは当然弟子たちのことを指すと考えられ、また神様がその主権によってお選びになったすべての人、神様を信じ、救われるべき人を指すと考えられます。その「彼らを保ってください」とは、「彼らが一つとなるため」とイエシュアは語っておられますが、これは神様を信じる者たち同士が、彼らだけで一つになるという意味ではなく、「わたしたち」すなわち御父と御子との、その完全な交わりと関係の中に、「彼ら」も「同様に」迎え入れられることによって「一つとなる」ことを意味していると考えられます。しかしイエシュアが「世にいらなくなる」のに対して「彼らは世にいます」とあります。つまり「彼ら」は世のものなのです。それを神様のものとしてくださるようとイエシュアは祈っておられると考えられます。「聖なる父」の「聖なる…」とは聖なるものとそうでないものとははっきりと分ける、区別すること、まさに聖別することを意味します。ここでイエシュアが御父を敬えて「聖なる父」と呼ばれたのは、「彼ら」を聖なるもの、すなわち神様のものとし、そうでないものとははっきりと区別してくださるようという祈りが込められていると考えられ、その区別、聖別がたとえ「彼ら」が世にあったとしても、揺るがないもの、神様の決定事項として「保たれる」ようという執り成しであると考えられます。

17:12 わたしは彼らといっしょにいたとき、あなたがわたしに下さっている御名の中に彼らを保ち、また守りました。彼らのうちだれも滅びた者はなく、ただ滅びの子が滅びました。それは、聖書が成就するためです。イエシュアは、御父が「聖なる父」すなわち聖別される御方であることを示すために、世にあるのものの中から12弟子をはじめとする神様を信じる者たちを選び出され、分けられました。そして「彼ら」を聖なるもの、神様のものとして扱いました。すなわち御言葉を教え、たとえではなく、奥義としての神様のご計画を伝えました。しかしその彼らの中に「滅びの子」が混ざっていたことが示されています。つまりイスカリオテ・ユダのような存在です。なぜ聖別されたはずの者たちの中にこのような存在があったのでしょうか。それは「聖書

が成就するため」だとイエシュアは語られました。この出来事を指し示していると考えられる記述が詩篇 41 篇にあります。

【新改訳改訂第3版】

詩篇

41:9 私が信頼し、私のパンを食べた親しい友までが、私にそむいて、かかとを上げた。

ここで親しい友に裏切られた「私」にたとえられているのがイエシュアと解釈するならば、ヨハネの 13 章で最後の晩餐であった「過ぎ越しの食事」の席で、イエシュアからパン切れを受け取った直後にサタンとともに部屋を出て行ったユダの姿がここに描かれている、つまり預言されていると考えられます。そしてこの預言には以下の続きがあるのです。

41:10 しかし、主よ。あなたは私をあわれんでください。私を立ち上がらせてください。そうすれば私は、彼らに仕返しができます。

41:11 このことによって、**あなたは私を喜んでおられる**のが、わかります。私の敵が私に勝ちどきをあげないからです。

41:12 誠実を尽くしている私を強くささえ、**いつまでも、あなたの御顔の前に立たせてください。**

41:13 ほむべきかな。イスラエルの神、主。とこしえから、とこしえまで。アーメン。アーメン。

「あなた」すなわち御父が、「私」すなわちイエシュアを「喜んでおられる」ということ、そして「私」イエシュアの願いが「いつまでも、あなたの御顔の前に立つ」つまり御父のみもとに在ることであることが解ります。このようにイエシュアが御父のみもとに行くこととは、単にイエシュアが御父との交わりを求めておられるというだけでなく、この詩篇にあるように、御父の喜びでもあり、また聖書に記された預言がすべて成就することを示していると考えられます。

## 2. 世にあつて

17:13 わたしは今みもとにまいります。わたしは彼らの中でわたしの喜びが全うされるために、世にあつてこれらのことを話しているのです。

イエシュアが御父のみもとに行くこと、御父と御子との交わり、「一つになる」とはすなわち「喜び」の関係だと言うことができます。その「喜び」が御父と御子の間だけに表わされるのではなく、御父と御子と「彼ら」すなわち神様を信じる者たちとの間にその「喜びが全うされる」、完全に表わされることが神様のご計画です。そしてこの成就を、この事実をイエシュアは「世にあつて…話して」おられることが強調されています。ということは、それを「世にあつて」聞く者たちは、「世にあつて」つまり今の世にいる間にそれを信じなければならない、待ち望まなければならないということだと考えられます。「世にあつて」信じるとはつまりそれを「見ないで信じる」ということです。

【新改訳改訂3】

ヨハネ 20:29 イエスは彼に言われた。「あなたはわたしを見たから信じたのですか。見ずに信じる者は幸いです。」

見ないで信じる者は幸いです。ということは「見てから信じる者は災いです」という逆説が成り立ちます。神様は生きておられます。そして聖書に記されたそのご計画を必ず成就されます。やがてすべての者がそれを疑いようのない事実として受け入れる時が来るでしょう。しかしそれを実際に目の当たりにした時に信じる者は災い、滅びであり、もはや手遅れなのです。「世にあって」聞き、「世にあって」信じる、すなわち見ないで信じる者は幸いです、救われるのです。

### 3. みことば

17:14 わたしは彼らにあなたのみことばを与えました。しかし、世は彼らを憎みました。わたしがこの世のものでないように、彼らもこの世のものでないからです。

「彼ら」すなわち神様を信じ、その「みことば」の現れであるイエシュアを信じ受け入れるものは、世から憎まれます。神様がご自分のものだけを聖別して受け入れ、そうでないものを受け入れられないように、世もまた神様のものを受け入れず、憎むのです。これは神様の聖別、その主権による選びが、唯一絶対のものであることの証しです。その基準となるのが「わたしは彼らにあなたのみことばを与えました」とあるように、神様の「みことば」、すなわち聖書です。この世のものではなく、神様のものであることの証しは、この聖書のみことばに耳を傾けているか、それを読んでいるか、そしてそれを信じ、受け入れているかどうかということです。

しかしそれはどれだけ多くのみことばを知っているかということではありません。神様から与えられた、たった一つのみことばだけを信じ、義と認められた人がいます。それはアブラハムです。彼が生きていた時代にはまだ聖書は存在していませんでした。そんな彼に与えられたみことばは、

【新改訳改訂第3版】

創世記

12:2 …わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大いなるものとしよう。あなたの名は祝福となる。

12:3 あなたを祝福する者をわたしは祝福し、あなたをのろう者をわたしはのろう。地上のすべての民族は、あなたによって祝福される。」

というものでした。聖書がまだ存在していなかった時代、アブラハムはたったこれだけのみことばを与えられ、それを信じて神様に義と認められました。彼はその生涯の節目節目で繰り返しこのみことばを受け取っています。ですから大切なのは、できるだけ多くのみことばを聞くことではなく、自分に都合の良いみことばを聞くことでもなく、神様から与えられるみことばを受け取ることです。アブラハムはこのみことばを受け取った後、生まれ故郷と自分の父の家を離れました。みことばを受け取ることと世から離れること、神様のものとなること

との型がここにあるのです。

17:15 彼らをこの世から取り去ってくださるようというのではなく、悪い者から守ってくださるようお願いいたします。

神様のものである「彼ら」は、そのみことばのゆえに世から憎まれます。しかし恐れる必要はありません。イエシュアがこのように祈ってくださったからです。みことばを信じ、受け入れてなおあなたが今日平安に生かされているとすれば、それは世に憎まれていない、世のものであるということではなく、イエシュアの祈りによって神様に守られているということです。前回は述べましたがイエシュアの祈りは宇宙最強の祈りです。神様を信じる者は、この祈りによって守られていることを覚えましょう。

17:16 わたしがこの世のものでないように、彼らもこの世のものではありません。

17:17 真理によって彼らを聖め別ってください。あなたのみことばは真理です。

神様の「みことばは真理です。」ということはみことばと真理は同義だということです。つまり「真理によって聖め別つ」とは、みことばによって聖別されることであり、すなわち先に述べたように、神様からみことばを与えられる、聖書のみことばを聞く者として選び分けられることが世のものではない、神様のものであるということの証しです。

#### 4. 遣わす

17:18 あなたがわたしを世に遣わされたように、わたしも彼らを世に遣わしました。

御父である神様とイエシュアとの関係は、遣わす者と遣わされる者の関係でもありました。このヨハネの福音書は、再三に渡ってそのことを主張しています。ですから「彼ら」すなわち神様を信じた者が、その御父と御子の交わり、関わりの中に受け入れられ、迎え入れられて「一つ」とされるということは、「彼ら」もまた神様に遣わされる者とされるということになります。イエシュアだけがこの世を去って、弟子たちを残して行かれた理由が、先に述べたことだけでなく、ここにもあると考えられます。

17:19 わたしは、彼らのため、わたし自身を聖め別ちます。彼ら自身も真理によって聖め別たれるためです。

この言葉は前の 18 節の言い換え表現、パラリズムだと考えられます。前の 18 節は「あなたが〇〇されたから、わたしも〇〇しました」という形式で語られており、この 19 節は「わたしは〇〇します。彼らが〇〇されるために。」という形式で語られています。どちらの言葉も自分と他者との繋がり、関連性を表現しているという点で共通しています。つまりこれは 18 節の「遣わす」ということがこの 19 節の「聖め別つ」ということと同義であることを示しているためだと考えられます。そしてそれは「真理によって」、すなわちみことばを受け渡すことで成り立つ関係であり、御父から御子イエシュアへ、そして弟子たちへとみことばが伝達されていくことで結ばれた繋がり「聖め別たれる」ということだと考えられます。つまり「遣わす」ために「聖め別つ」のであり、「聖め別つ」ことによって「遣わす」ことができるということだと考えられます。

17:20 わたしは、ただこの人々のためだけでなく、彼らのことばによってわたしを信じる人々のためにもお願いします。

御父からイエシュアに、そして弟子たちへと受け渡されてきたみことばによる「聖め別つ」という名の繋がり

は、神様が人に与えられた一番最初のみことば

【新改訳改訂第3版】

創世記

1:28 神は彼らを祝福された。神は彼らに仰せられた。「生めよ。ふえよ。地を満たせ。

というみことばに従うように、イエシュアが世に遣わされ、そして御父のみもとに上られて以降、絶えることなくどんな迫害にも攻撃にも屈することなく、全世界にひたすら増え広がり続けて今日に至ります。神様のみことばを聞く者、聖書に記されたことを信じ受け入れる者は、この時の弟子たちと同様に、みことばによって「聖め別たれ」、次に記されたイエシュアの祈りの対象者となります。

## 5. 一つとされる

17:21 それは、父よ、あなたがわたしにおられ、わたしがあなたにるように、彼らがみな一つとなるためです。また、彼らもわたしたちにおるようになるためです。そのことによって、あなたがわたしを遣わされたことを、世が信じるためなのです。

「世が信じるため」、弟子たちが地上に残され、そしてこの時イエシュアによって遣わされた理由がまさにこれでした。御父から御子イエシュア、イエシュアから弟子たち、そして弟子たちからすべての国々の民、その世代から次の世代、更に次の世代の人々へと受け渡され、今もお広がり続ける繋がり、それはみことばによるものです。このみことばによって御父と御子と弟子たちと、そしてそれを信じ受け入れたすべての国のすべての世代の人々とは「一つ」とされているのです。これは驚くべき神様の御業です。

17:22 またわたしは、あなたがわたしに下さった栄光を、彼らに与えました。それは、わたしたちが一つであるように、彼らも一つであるためです。

前回のメッセージで、「栄光」とは交わり、関わりを指し示す言葉であることを述べましたが、今日の文脈ではそれをみことばと言い換えることができます。ですからこの箇所は「御父が御子に与えられたみことばが、彼ら弟子たちに与えられた」と言い換えることができます。

17:23 わたしは彼らにおり、あなたはわたしにおられます。それは、彼らが全うされて一つとなるためです。それは、あなたがわたしを遣わされたことと、あなたがわたしを愛されたように彼らをも愛されたこととを、この世が知るためです。

イエシュアはこの祈りの中で「一つ」とされるという言葉が 4 回も用いて、それを強調しておられます。なぜならここまで述べてきた、交わり、関係、繋がり、この「一つ」であることが最も重要な条件であるからだと考えられます。たとえ御父と御子に交わりがあり、イエシュアと弟子たちという関係があったとしても、お互いの思いが異なっていたり、意見が食い違っているならば、それは正しい関係とはならず、喜びにもならず、どんな計画も成し得ないからです。それがたとえ悪魔の関係であっても同じだとイエシュアは言われました。

【新改訳改訂第3版】

マタイ

12:24 これを聞いたパリサイ人は言った。「この人は、ただ悪霊どものかしらベルゼブルの力で、悪霊どもを追い出しているだけだ。」

12:25 イエスは彼らの思いを知ってこう言われた。「どんな国でも、内輪もめして争えば荒れすたれ、どんな町でも家でも、内輪もめして争えば立ち行きません。」

12:26 もし、サタンがサタンを追い出していて仲間割れしたのだったら、どうしてその国は立ち行くでしょう。

交わり、関係において「一つ」であるということは最も重要です。それが何らかの働きを目的としたものならばなおさらです。神様のご計画においてこの「一つ」であるということは絶対必要条件なのです。ですからイエシュアは「一つ」となることを何度も祈られたのだと考えられます。またこの「一つ」という言葉はヘブル語でエハッド(אֶחָד)と言いますが、この言葉が聖書で最初に使われたのが創世記 1:5 です。

【新改訳改訂第3版】

創世記

1:1 初めに、神が天と地を創造した。

1:2 地は茫漠として何もなかった。やみが大水の上にあり、神の霊が水の上を動いていた。

1:3 神は仰せられた。「光があれ。」すると光があった。

1:4 神は光を見て良しとされた。神は光とやみとを区別された。

1:5 神は光を昼と名づけ、やみを夜と名づけられた。夕があり、朝があった。第一日。

神様は天地創造のエハッド、すなわち「第一日」に光とやみとを区別されました。つまりエハッドは本来「区別」する、はっきりと分ける、ことを指し示しているのです。ですからエハッド「一つ」にされるとは、交わり、関係、繋がりを指し示すだけでなく、区別されること「聖め別つ」ことをも指し示すという、まさに二つの意味を「一つ」にした言葉であると考えられます。

## 6. 愛する

さらにイエシュアは、御父から御子へ、そして弟子たちから世界へと広がるこの「一つ」とされる繋がりを「愛される、愛する」という言葉に言い換えておられます。ヘブル語でこれをアーハヴ(אָהַב)と言います。この言葉が最初に使われた箇所も見てみましょう。

【新改訳改訂第3版】

創世記

22:2 神は仰せられた。「あなたの子、あなたの愛しているひとり子イサクを連れて、モリヤの地に行きなさい。そしてわたしがあなたに示す一つの山の上で、全焼のいけにえとしてイサクをわたしにささげなさい。」

22:3 翌朝早く、アブラハムはろばに鞍をつけ、ふたりの若い者と息子イサクとをいっしょに連れて行った。



彼は全焼のいけにえのためのたきぎを割った。こうして彼は、神がお告げになった場所へ出かけて行った。

22:4 三日目に、アブラハムが目を見ると、その場所がはるかかなたに見えた。

22:5 それでアブラハムは若い者たちに、「あなたがたは、ろぼといっしょに、ここに残っていないさい。私と子どもとはあそこに行き、礼拝をして、あなたがたのところに戻って来る」と言った。

22:6 アブラハムは全焼のいけにえのためのたきぎを取り、それをその子イサクに負わせ、火と刀とを自分の手に取り、ふたりはいっしょに進んで行った。

これはアブラハムが神様から息子のイサクをささげよという命令によって試された場面ですが、ここで「愛しているひとり子」という部分に最初のアーハヴがあります。この出来事の中でアーハヴが指し示している行為は「いっしょに連れて行く」そして「戻って来る」ことだと考えられます。これはまさに御父とイエシュアを表す型です。イエシュアは御父のみもとに行こうとしておられますが、言い換えるならこのアブラハムのように、御父がイエシュアを連れて行こうとしておられるのです。アブラハムは「三日目」にイサクを連れて行ったとありますが、イエシュアについて「三日目」という言葉はやはり十字架の死からの「復活」を意味すると考えられます。つまりこのアブラハムの出来事の中にイエシュアが十字架の死からの「復活」を経て御父のみもとに行くことが示されていると考えられます。そして残された「ふたりの若い者」これは律法において証人を意味する型だと考えられ、弟子たちがこれに当てはまります。そこに「戻って来る」ことが示されています。これが「再臨」を指し示すことは言うまでもありません。このようにアーハヴという言葉を用いた出来事の中に神様のご計画が型として表されていると考えられ、私たちが一般的に抱いている「愛する」という意味だけではないことが解ります。つまり御父が御子を愛され、そして彼ら弟子たち及び信じるすべての者を愛されるということは、御父のご計画がこれらの者たちの上に表される、成就するということだと言うことができます。

17:24 父よ。お願いします。あなたがわたしに下されたものをわたしのいる所にわたしといっしょにおらせてください。あなたがわたしを世の始まる前から愛しておられたためにわたしに下されたわたしの栄光を、彼らが見るようになるためです。

愛するという意味のアーハヴが「いっしょに」という行為を指し示していると述べました。ここではそれが文字通り「いっしょにおらせてください」と祈られています。そしてアーハヴは神様のご計画を指し示す言葉ですから、それが「世の始まる前から」すでに定まっていたことがここに示されていると考えられます。「わたしに下されたわたしの栄光」とは、その神様のご計画がイエシュアによって成就した状態、完成を指し示していると考えられ、それを弟子たち及びすべての国のすべての世代の神様を信じる「彼らが見るようになる」ということだと考えられます。

## 7. 正しい父

17:25 正しい父よ。この世はあなたを知りません。しかし、わたしはあなたを知っています。また、この人々は、あなたがわたしを遣わされたことを知りました。

イエシュアは 17:11 で御父を「聖なる父」と呼ばれましたが、ここでは「正しい父」と呼んでおられます。この呼び方も聖書でここだけに使われています。聖書における「正しい」ことの基準はいつでも神様です。ですからこれは神様である父と言い換えることができると考えられますがこの「正しい」という意味のヘブル



語ツアーディーク(אֲדִיָּק)についても見てみたいと思います。

【新改訳改訂第3版】

創世記

6:9 これはノアの歴史である。ノアは、正しい人であって、その時代にあっても、全き人であった。ノアは神とともに歩んだ。

6:11 地は、神の前に墮落し、地は、暴虐で満ちていた。

ノアはツアーディーク「正しい」人でした。しかしただ正しかったのではなく、暴虐に満ちた地で「正しい」人でした。そしてその生き方は「神とともに歩む」というものでした。このように「正しい」とは神様以外のものから離れ、ただ「神様とともに歩む」という行為を指し示していることが解ります。つまり「正しい父」とは「神様とともに歩む父」ということになります。それは御子であるイエシュア、そして真理の御霊である聖霊とともに歩まれる御父ということであり、「正しい父」とは三位一体なる神を指し示す言葉であると考えられます。

イエシュアはこの「正しい父」を「知っています」と言われました。一方「この人々」つまり弟子たちは「あなたがわたしを遣わされたこと」すなわち御父が御子イエシュアを遣わされたことを「知っている」と言われました。この二つの「知っている」には大きな違いがあります。弟子たちの「知っている」には「御父が御子を遣わされたこと」という限定があるのに対し、イエシュアにはそれがありません。つまりイエシュアは御父のすべてを知っておられるということです。何の秘密も隠し事もない御父と御子の完全な交わり、関係がここにも示されています。

## 8. 知らせる

17:26 そして、わたしは彼らにあなたの御名を知らせました。また、これからも知らせます。それは、あなたがわたしを愛してくださったその愛が彼らの中にあり、またわたしが彼らの中にいるためです。」

この時点ではまだ弟子たちは神様についてほとんど理解していませんでした。ただイエシュアが御父である神様から遣わされた御子であることだけは知っていました。イエシュアはそんな彼らに「あなたの御名」すなわち神様の全存在、そのご計画のすべてを知らせていくと語られました。つまり人が神様という御方を知るためには、まず初めに「イエシュアが御父である神様から遣わされた御子」であることを知らなければ、信じなければならぬということです。まずこれを知らなければ、信じなければ、何を聞こうが、何を学ぼうが神様を知ることはできないということです。律法の専門家であったパリサイ人などのユダヤ教の指導者たちがその例です。彼らはそれを受け入れることができなかつたために、律法主義に陥り、誤った聖書解釈を持ち続けたまま今日に至ります。「イエシュアが御父である神様から遣わされた御子」であることを知ることが神様を知る唯一の鍵なのです。この鍵によって私たちは今神様についてそのご計画について様々なことを知ることができるようになりました。そして「これからも知らせ」てくださいます。これは祈りというよりもイエシュアの決意表明であり私たちへの約束です。私たちのこれからが、ますます神様を知る喜びで満たされますように。